青春の報酬

井上友一郎

青春の報酬

井上友一郎

新潮社

青春の報酬

昭和三十六年三月二十一日　印刷
昭和三十六年三月二十五日　発行

定価　二五〇円

著者　井上友一郎

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(341)七一一一(九)
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものはお取替えいたします。

印刷・図書印刷株式会社　製本・神田加藤製本所

© T. Inoue　Printed in Japan

青春の報酬

目次

焼け跡の土 七
公園のヒーロー 三
逃げた魚 八
野望の門 三
最初の嵐 元
補欠さん 三
可哀そうに 四
不祥事件 四
煙のような豪速球 三
買いにきた男 三
真夏の明暗 三
野球学校の校長さん 三
野球養子 三
海のものか山のものか 六
うどの大木 四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

プロの出戻り　八九
監督も人間や　九五
一大敵国　一〇〇
ガシンショウタン　一〇六
出場停止　一一
観測気球　一一七
天皇の鼻いき　一二三
華やかな舞台の外で　一二六
東京へ　一三三
鍵穴のぞき　一三九
敵か味方か　一四四
無条件降伏　一五〇
一難去ってまた一難　一五五
色じかけ　一六〇
接吻は接吻　一六五

秘中の秘 一七一
男と男 一七六
野良犬の行方 一八三
ゼニの世界 一八七
マス・コミの英雄 一九三
一つの修羅場 一九八
再び陽の目を 二〇四
爆弾声明 二〇九
天皇の動静 二一五
只今、球界浄化中 二二〇
宣戦布告 二二六
ノーコメント 二三二

青春の報酬

装幀　長尾　みのる

焼け跡の土

1

第二次世界大戦が終った。

日本の無条件降伏により、ようやく名ばかりの平和はよみがえってきたけれども、大部分の日本人は、その日その日の食糧を漁り求めて、また新たなる戦争に駆り立てられたも同然である。

大阪の玄関口たる梅田駅の正面には、いち早く巨大なヤミ市が立ったものの、そういう場所が賑わいを呈すれば呈するほど、市民たちの飢餓状態がひどいことを物語っている。

私立光洋商業学校の校長、今泉順之助は、戦時中に着古したカーキ色の国民服を身にまとって、いま、疲れ果てた足どりで、梅田の阪急電車終点に降り立ったが、その表情には、ケシ粒ほどの明るさも見られない。

もちろん、今泉校長の周囲を歩いていく人々も、殆ど例外なしに、みんな打ちのめされたような面持ちだった。彼等の衣服は汚れているし、その皮膚の色つやも、明らかに慢性栄養失調のために全く生気を失いつくしているようだ。

「きょうは、どうやら、これだけの食糧にありついたが、――」

と、彼等の無気力な顔付きは、大概、このようなことを暗黙に語っている。

「しかし、明日の食糧は大丈夫か知ら。そして、あさっては？　それから先は……？」

今泉校長とて同じことで、やはり一家の責任者である以上、漠然と家庭の不安に取りつかれているのだったが、しかし、彼は、その種の焦燥状態のほか、なおもう一つ、どうしようもない大きな絶望感に襲われながら、たった今、梅田のヤミ市の前面に佇んでいるのだった。

この日、校長は阪急沿線の十三にある光洋商業学校の焼け跡に立ち寄ってきたのだけれど、つい二、三カ月前、相次ぐアメリカ空軍の爆撃で、校舎は九分通り焼け失せて、現在、見るも無惨な瓦礫と焼けトタンの山々が、そこここに汚い動物の死骸のごとく、積み重なっているだけである。

戦争は終ったものの、どうして、完全な校舎一棟もない光洋商業学校が、戦前と同じだけの、多くの子弟を収容することが出来るか。いや、仮りに大々的な広告で生徒募集を呼号しても、果して生徒が集まってくるであろうか。前途というより、この眼前の惨めさを、どうして打開するこ

とが出来るか。

今泉校長の絶望は、そこにあって、世の常の乏しい衣食住に悩みつづける市民たちより、何層倍かの不安に包まれていることは言うまでもないことであった。

結局、今泉校長の腹の底では、(ええい。成るように成ってしまえ!)というくらいの、やけくそな感情が、僅かの支えになるらしく、人間は、このような自暴自棄なあきらめで、辛うじて一種の苦界から逃れることが出来るのかも知れないのである。

校長で校主を兼ねる今泉順之助が、つまるところ学校経営の根気や勇気を捨ててしまえば、もはや一市民と寸分も変りがなく、これから梅田のヤミ市へでも足を向けて、せめて何か食料品か衣料品の一つでも手に入れて自宅へ帰ろう、と考えたことに不思議はないのだ。

今泉校長は、初秋の、まだ蒸暑い午後の街角から歩みを起して、木炭自動車やアメリカ兵のジープなどの往き来する市電の大通りを横断すると、まぶしい西陽に両眼をかすめながら、夥しい男女でひしめいているヤミ市へと入っていった。

「やあ。今泉先生と違いまッか?」

突然、彼はバラック建ての、ぜんざい屋の前で、うしろから呼びとめられた。

びっくりした校長は、すぐその場に足をとめて、背後にキョトンとした瞳を注ぐ。

すると、薄汚い開襟シャツに、買い物カバンを斜めに肩からぶらさげている一人の男が、なつかしそうに笑いながら近付いてきたのである。

今泉校長はニヤリと笑った。

「おう。猪ノ熊君……」

「先生! えらい御無沙汰しまして、すンまへん」

「いや、いや。御無沙汰もヘチマもあったもんやない。お互に、この戦争で、えらい目に遭うてしもたが、まあ、こうして命だけ助かっただけでも結構な話や」

「御もっともですわ、先生!」

と、猪ノ熊はペコリと頭を下げて、

「ところで、先生。お宅のほうは、空襲にもやられてしまはらへんのだしたか」

「お陰で、家だけは辛うじて助かったが、しかし、かんじんの学校のほうは、六月の空襲で丸焼けや」

「へえ? 学校がやられましたか。そら、何も知りまへんで、申しわけありまへんでした」

「それはそうと、君のうちは、どうやった?」

「へえ。それが、先生に勝手なお願いをしまして、教職を退かして頂いてから、ちっぽけな軍需工場に関係しましたのが運の尽きで、工場はやられますし、すぐ傍の社宅に入ってました私どもは、やっぱり六月の大空襲で一コロでし

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

たわ……」

「ふーん。それは気の毒なことや」

今泉校長は、口さきでは同情めいたことを洩らしているが、必ずしも心の底から、この猪ノ熊をいたわっている気はない。なぜなら、かねて眼端のよく利く猪ノ熊が、今度の太平洋戦争の初期の頃に、それまで勤務していた光洋商業の教職に見切りを付けて、いわゆる収入の多い軍需工場へ移っていった事情を、校長は、誰よりもよく知りぬいていたからである。

だが、その猪ノ熊が、こうして尾羽打ち枯らして今泉校長の面前に立っていると、もはや人間としての小ずるさや、抜け目なさも消え果てて、お互に戦争被害者の一人々々としての親しみさえ湧き出してくるのであった。

「まあ、お互に、――」

と、校長はしみじみした口調で言った。

「こうして無事に生き残ったことだけを、よろこぼう。人間は気の持ちようや。そのうち、多少は、ええことでもあるかもわからん」

「先生。そいで、学校のほうは、どないしやはるお考えだす？」

猪ノ熊は、あごの先きの薄い不精ひげを、明るい西陽の光線に光らせながら、ひょいとポケットを探って、手巻きらしい形のよくない巻きタバコをつまみ出した。そして、マッチを何度もすって、軸木の五本も六本も無駄にしてから、ようやく心細い煙を吐き出す態たらくだ。マッチも、タバコも、悉く品質が悪いせいだが、しかし、それは猪ノ熊の貧相な姿に似つかわしいと言わねばならない。

「さあ。その問題では、いろいろ頭を痛めとるが、どっちにしても、先き行き暗い見通しよりない」

「そうだすか。まるで日本国の前途と同じことだすなあ」

猪ノ熊は、あいまいな微笑をうかべて立っていたが、その時、いきなり傍を通りかかった三十がらみの朝鮮人らしい男が二、三人、どんと猪ノ熊の身体を突き飛ばして、

「こら！　どけ、日本人！　敗戦国の人間は引っ込んで、けつかれ……」

と、その場によろめく猪ノ熊を口汚く罵って、むこうのバラックの陰へと歩いていく。

2

それから半時間ばかり後のことだ。

今泉校長と猪ノ熊は、すぐ近くの、「うどん」と看板を書いて出したバラックの店に入り込んで、久々に白い素うどんを食べながら喋っていた。

店のなかと言っても、別に、ちゃんとした床板が敷いてあるわけではなく、湿って、ぐにゃぐにゃした埃だらけの

土間に、ただ夏の縁台みたいな長い板の腰かけが置いてあるばかりで、テーブルと言っても、古材木に二本の脚が土中に打ち込んであるに過ぎない。

けれども、うどんは人々の食欲をそそると見えて、入れ換り立ち換り、おなかを空かせた日本人が、足繁く入り込んでくるのである。

猪ノ熊も、うまそうに、うどんの汁をすすっていたが、彼には、うどん以上に、魅力に富んだうまい話が眼前にぶらさがっているわけだった。

それは、今泉校長という存在で、いま、この人の腹一つで、彼が窮迫した浪々の身を、どうにか救ってもらえるかもわからないからである。いや、校長個人の胸算段ばかりではなく、あの光洋商業学校が運よく再建の道に踏み出し、戦前同様の繁栄を迎えることが出来たら、この哀れな猪ノ熊も、再び若い生徒たちの師表として、教壇に立つ人間になれる見込みがあるかも知れない。

猪ノ熊は、熱心に話し込んだ。

「先生！　何事も思い切った決断というもんが必要ですわ。ここで、先生が、ぐずぐずと迷うておられて、大事な時機を逃してしまわれたら、もう光洋商業は立ち遅れになってしまいがすがな」

「そうかて、君、簡単に決断々々と言うても、先き立つものは金や」

今泉校長は厳粛な声を発した。

「しかも、問題は金ばかりやない。たとえ金の見込みが付いて、どうやらこうやら校舎くらい建ったとしても、アメリカの占領軍がやって来よって、どないな学制改革をやりよるかわかれへんぞ」

「大丈夫です。アメリカさんが、どないに学制改革を命令しよりましても、こっちは、ちゃんとその通り、むこうさんの言いよる通りにしたらよろしいやおまへんか」

「そう言うが……」

「いえ、ほんまだす。私、生意気なことを言うようですけど、もう、こうなったら、一か八で、先生も思い切った経営方針を取らはって、要するに、この関西なら関西に、二つとないような特色を盛った学校に仕立てあげたら、よろしいやありまへんか」

「理想は、誰しも、そうありたい」

校長は、うどんの汁を、最後の一たらしまで、きれいに吸って、いささか淋しげな顔付きを猪ノ熊の面上に向けた。

「けれども、学校経営というもんは、そう簡単に、ヤミ市みたいな繁昌を見せるもんやない。いわんや、伝統とか特色というもんは、永い年月を重ねた上に出来るもんで、一朝一夕には、どないもならん」

「しかし、先生。お言葉だすが、伝統というもんかて、つくり出すもんで、ただずるずると年月だけ経ったら、手洗

鉢のコケみたいに、天然自然に勝手に生えてくれよるもんとは違いまっせ」
「それはそうや」
「そンなら、先生！」
と、猪ノ熊はいよいよ力こぶを入れて、
「その伝統や特色を、先生のお力で、――いえ、その、つまり、先生の実力というもんで、これから強力につくり出さはったら、よろしいやおまへんか」
「君！　なかなか勇ましいことを言うが、然らば、やナ。そもそも、そんな関西に二つともないような特色を、如何にして発揮せしむるか――その具体的な方策を抱いとるンかいな？」
「具体的な方針ですか」
「そうや。真理は常に具体的でなけらにゃいかん。ただ、口先きで特色の伝統のと言うとるだけでは、何もならん。問題は、具体的な大方針があるかどうかや」
「具体的な大方針は、ちゃんとありまっせ」
と、猪ノ熊は又しても、手巻きのタバコをつまみ出した。
青い、ふわりとした煙のなかから間もなく彼の具体的な経綸が、そのダミ声に乗って今泉校長の耳に響いた。
「たとえば、だすな。――もし、私が学校経営の一端に参画さして頂けると仮定しますと、校舎より何より先きに、運動場を整備しますわ」
「なに、運動場？」
「そうだす。そして、ちょっと費用を張り込んで、バックネットの上等な奴をつくりまして……」
「バックネットって、野球の、アレかな？」
「そうですがな。つまり、野球を完全にやれるだけの設備を、ちゃんと整えますのや。何しろ、今度の戦争では、幸か不幸か、日本はアメリカさんに占領されることになりましたけど、もし、これがソ連かシナやったら、この構想も、こうスラスラと運びまへん。しかし、何よりありがたいのはアメリカさんが占領してくれよるから、野球は、よもや禁止しよることが有り得ない、と睨んでまっせ」
「それで、どうするンや。つまり、学校で野球をやらせて、占領軍の御機嫌を取る、とでも言うのか」
「いいえ。何の、アメリカの御機嫌みたいなもん、取るためとは違いますわ。つまり、光洋商業に野球部をつくって、こいつを強いチーム、――たとえば大阪一、関西一、いえ、いえ、あわよくば日本一のメチャメチャに強いチームに育てるために、ただもう、勉強なンか、どうでもよろしいわ。とにかく野球のうまい生徒を、ありとあらゆる学校から集めて、入学させたらよろしいンだす」
「野球が強うなって、どうするンや」
「そうなったら、しめたもんだす。野球が絶対に強うなって、全国一流ということになったら、続々と生徒は殺到し

て来よります。しかし、野球の下手な奴は、みんな入学試験で落してしもて、絶対に実力本位で、入学を許可しますのや」

「ふーむ。しかし……」

さすがの今泉校長も、この奇想天外な猪ノ熊の構想には、たやすく同調しかねて暫く眼をパチパチさせながら、うどんの汁の匂うなかに坐り込んでいるのだった。

公園のヒーロー

1

天王寺公園では、スズカケの葉が黄ばんでいる。

このスズカケの梢越しに、かつては地上数十メートルという通天閣が、いわゆる南大阪の名物として空中高くそびえ立っていたものだが、いまは、それも戦時中の鉄資源回収に取り払われて、昔の名残りは跡形もない。

戦争は、すべてのものに大きな傷を与えたけれども、この天王寺から新世界の盛り場へかけて、通天閣を失くしたことは、言わば牙を抜かれた猛獣にもたとえられるし、首をチョン切られた人間の胴体をも連想させる。

けれども、深刻な虚脱や絶望を乗り越えて、すべての人間の心には、徐々にではあるが、再び立ちあがっていく気配も感ぜられる。日と共に、胃の腑の空しさが少しずつ満たされると、やはり人間は、生きていくことに、あらゆる情熱を注ぐもので、とりわけ子供たちには、この回復が早かった。

現に、きょうも天王寺公園の広場では、どこから集まっ

てきたものか、二十人近い小学生らしい児童たちが、二タ組に別れて野球の試合をやっているのも、当時としては珍しい光景だった。

ジャンジャン横丁から動物園のほうへ出て来た通行人や、公園北口から阿倍野の方角へ抜けていこうとしていた人たちも、今度の永い戦争のために、絶えて久しく見ることの出来なかったせいであろう。この、十二、三から十四、五くらいの一団が、有り合せの短ズボンやユニフォームの、まちまちの服装で、スポンジ・ボールの野球をやっているのを、ぽかんと立ちどまって眺めていた。

もちろん、この種の通行人が、誰も彼も、ひま人だったからではあるまい。つまるところ、この人たちには、野球というものへの郷愁が、久々に強くよみがえってきたのであろう。

「ナイス！　ナイス！」

「おう！　ファイン・プレーや……」

子供たちの投打にわたるプレーを見物しながら、時々、見物の大人たちのなかから、そんなふうな英語、——というより、野球用語が、口をついて飛び出した。

それは、ほんの数カ月ばかり前には、いわゆる敵性外国語として、全日本人の間では、絶えて聞かれぬ一種のタブーとされていた言葉である。

じっさい、昭和十六、七年頃の、太平洋戦争の初期には、いま考えると、コッケイともバカバカしいとも、何とも言えない気違い沙汰が大まじめに横行し、当局の指示によって、辛うじて挙行されていたプロ野球の試合においても、ストライクを、「よし、一本」と呼び、アウトを、「出て行け」とか、「戻れ」とか呼んでいたのだ。それが公園や空地の草野球なら、とにかくも、あの後楽園の堂々たるグラウンドで、日本最高のプロ球団の公式戦における審判用語であったから、この底抜けのアホらしさは、多くの野球ファンを呆れ返らせたのも道理であった。

しかし、日本が戦争に敗れて、軍閥が亡びてしまうと、誰が改めようというわけでもなく、こうして天王寺公園の子供の草野球に於てさえも、自然に彼等の口からあふれる言葉は、やはり、「ストライク」であり、「アウト」であり、「セーフ」である。

彼等の服装は、みすぼらしく、その体格も、必ずしもすぐれていないが、しかし、いま、彼等の頭上には晩秋の青空が限りなくひろがっているし、太陽はまた平等に、明るい光線を降りそそいでいる。

ボールや用具も、どこの古道具屋から集めてきたかと思われるほど貧弱で、お粗末だったが、それでも、正しい基本にのっとるバッティングから打たれた球は、やはり、正しく、鋭いライナーとなって、遠く外野の植込み近くまで飛んでいった。

「ほほう！　あの子、大きな身体をしとるさかい、よう打ちよるわ……」

一回、二回とインニングを重ねて見ている通行人の眼にも、最初はドングリの背くらべみたいに思われていた一群に、少数のヒーローが印象に残ってくるものである。

その子は、傍でよく眺めると、やはり小学校の六年生くらいの、あどけない童顔には違いないが、他の連中より上背があって、腕っぷしも強いらしい。ポジションは、一塁をやっていたが、打席に立つと、細いバットを軽々と引き付けて、いきなり、びしりと打ち抜いていく、そのフォースルウが天性のものらしく、打球は、ぐんと延びて、何度も外野手の間を痛烈に抜くのだった。

ちょうど三度目の打席の時、さっきから何人かの見物人の横手に立って、じっとその子供に注意していた猪ノ熊源太郎は、思わず身体を前方に乗り出して、何とも言えないほど真剣な眼付きになった。

「ストライク！」

と、やや年長の、審判役をやっていた中学生風の少年が右手をあげる。

ボールは、古新聞を四つに折って、地べたに置いてあるホームプレートの外角低目に、すとんと落ちて、つまり、見逃しのストライク・ワンであった。

「おい、広中！　一丁、打てよ！」

「ホームラン、もう一本、打て！」

と、その子の属する攻撃側チームでは、これも、埃だらけの両脚を地べたに投げ出したまま、一塁側に坐っていたが、さすがに、自軍のヒーローであると見えて、しきりに期待と激励の声をかける。

「ボール……」

と、第二球を審判が宣告しようとした途端、その広中という少年は、飛びあがるようにして、頭上に近い高いボールを、くるりと大きく空振りしたので、改めて、審判が言い直した。

「ストライク、ツウ！」

見ていた猪ノ熊が、カーキ色の国民服の膝を叩いて、ふいに、こんな叫びを発した。

「あかん！　そんな悪い球に手を出したら……」

見物人が、クスクスと笑いを洩らした。

ところが、その次のドまんなかへ入ってくるストライクを、広中は、びしりと打った。

すると、ボールは糸を引いたように外野手の頭上に舞いあがり、ぐんぐん延びて、広場の隅のスズカケの木立のなかへ吸い込まれていったのである。

「うわっ……ホームラン！　ホームラン！」

「走れ、走れ。もっと、走れ！」

もちろん、打った広中は、一塁から二塁を越え、更に三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.